

がんを経験した先生のお話

今から19年前の夏、40歳という区切りの年に初めて人間ドックを受診する機会を得て、早期の「大腸がん」が見つかりました。当時、学年主任を務めていた私は体調も良く、全く病気とは縁のない状態でした。人間ドックで提出した検便で、潜血反応が認められるとのことから、夏期休業を利用して地元の公立病院で大腸の精密検査を受ける事になりました。

まず、大腸内にバリウムを入れてレントゲン撮影を行う「注腸透視検査」を行ったところ、主治医から気になる影が写るとのことで、さらに診断の精度高めるため、直接大腸内にカメラを挿入する「大腸ファイバー検査」を実施。その時、モニター画面に直径5mm程度の隆起物が写り、その場で早期の大腸がん（直腸がんでステージI b）と診断され、開腹手術の実施が決まりました。

手術日を決める診察の際、院長先生が「よくこの大きさで発見できましたね。本当に幸運ですよ。」とおっしゃったのが今でも脳裏に残っています。すなわち、「がん」は早期の段階では自覚症状が全く出ない病気であって、この段階では発見しにくいものなのです。残念ながら、自覚症状が出てから発見されるがんは、少なくともある程度の進行が認められる「進行がん」となっていると思われます。

がんになった人は誰も「まさか自分ががんになるとは！」と思うでしょう。しかし、現在は2人に1人が「がん」になる時代です。「がん」は決して怖い病気ではありません。でも決して侮あなどることのできない病気です。

私自身が「がん」を経験して、「がん」を克服する上で一番大切なのは、「がんをどのステージ（進行度合い）で発見するかにかかっている。」とつくづく思います。今では、早期に発見できればほぼ完治できる時代になっています。高校生の若いときから「がん」に関心を持ち、がんになるリスクを低くする生活習慣を実践するとともに、正しい知識をもって「がん検診」を受けることで、大切な自分の命、そしてかけがえのない家族や友人を「がん」から守りたいものです。

奈良県立吉野高等学校 上田裕康 校長



若いうちから、がんについての正しい知識や検診の必要性について知ることは、とても大切です。

今日からできることを考えてみよう！



自分ができること

身近な人に対してできること